

# 千葉県でタマノリグチをみつけた！

大作 晃一

図鑑では知っているけど、実際には見たことのないきのこってけっこうある。そんなきのこに出会うと格別うれしいものだ。タマノリグチもそんなあこがれのきのこの1つであったが、2006年7月23日、清和県民の森で偶然にも巡りあうことができた。千葉県内では初めての採集記録。ちょうど、千葉県立中央博物館の主催する「夏の山の昆虫」に参加しての出来事であった。



房総の山の森で昆虫の採集と観察をします

### 虫好きの親子が20人ほど集まった

2006年7月22日、小学2年生になる息子の晃平と清和県民の森に向かった。「夏の山の昆虫」に参加するためだ。この行事は、1泊2日で昆虫の採集と観察をし、夜間採集や標本作りの解説もある。虫好きの子供たちにとってはたまらない。人気が高く、前年度は抽選にもれて参加できなかった。

途中、養老溪谷付近の森のなかに入って、ヤマビルを見ることができた。晃平にとってヤマビルは憧れの1つであり、ぜひ見たいとおもっていた。でも、ずぼんをめくると何匹ものヤマビルが足に張り付いている状況をまのあたりにすると、顔から血の気がひいた。手早くヤマビルを払い落とし、もと来たみちへ。森を出るころには半ベそ状態の晃平。車にもどって、全てのヤマビルを払い落とすと安心したらしい。ヤマビルを飼いたいと言い出す。しかたがないので、数匹のヤマビルをタッパに入れた。

ムシキングの影響だろうか、子供たちにとってカブトムシとクワガタは絶大な人気だ。清和県民の森を歩くとカブトムシとコクワガタを見ることができた。でも、晃平はたいして喜

ばない。どちらも、自宅の近所でたくさん見つけられる。今回の目標はなんといってもミヤマクワガタ。関東の平地ではほとんど見かけない。考えてみると私の子供のころも憧れのクワガタだった。近所ではノギリクワガタとコクワガタがほとんど。たまにヒラタクワガタがとれると大喜びしたものだ。夏休みに日光や水上にキャンプにいくと、ミヤマクワガタがとれた。ほとんどはメスだ。オスはめったにとれない。友達がオスをとったりすると、とてもうらやましかった。私自身、子供のころにオスはとったことはなかった。晃平もまだミヤマクワガタは見ることがない。夏休みにミヤマクワガタをとろうと約束してしまった矢先、清和県民の森にもいることがわかった。実は標高の低い山しかない千葉県に、ミヤマクワガタがいるとは考えてもみなかった。

合宿所には、虫好きの親子連れが20人ほど集まった。私は、清和県民の森で見つけたきのこの撮影をさっさと片付けてしまうことにした。コタマゴテングタケ、ウコンハツ、ミドリニガイグチ、ニガイグチモドキ、キニガイグチ、ニ

セアシベニグチ、ハナサナギタケなどの白バック写真を撮影した。

夕食後、いよいよメインイベントのライトトラップ。子供たちは期待でむねがふくらむ。しかし、ロケーションはよくない。なんと周りはスギ林。ライトはハロゲンだ。本当は紫外線領域の波長を多く含む水銀灯を使いたいところだ。予想通り虫の飛来数は少なかった。合宿所にもどると、街燈まわりをすることにした。あちこちの街燈をまわると、いろいろな虫にであうことができた。黒光りする大きなゲンゴロウのようなもの、ガムシという水棲昆虫らしい。初めて見た虫だ。カブトムシはたくさん飛んでいた。コクワガタにまじって、ミヤマクワガタのメスもみつかった。晃平は大喜びだ。クワガタのメスはどの種類も同じような格好をしていて見分けるのがたいへんだ。ミヤマクワガタの足の付け根は黄色くなっているのでひと目でわかる。

その後もミヤマクワガタのメスは数匹みつかったものの、オスはいない。やっぱりオスがほしい。途中、八街からやってきたという親子連れは、ミヤマクワガタのオスをもっていた。なんと、レアもののネプトクワガタのオスもいるではないか。夜も更けてきた。オスはみつけることができないまま、合宿所に帰ることに。合宿所であと片付けをしていと、最後に幸運がやってきた。晃平が玄関の明かりに飛んできたミヤマクワガタのオスをみつけた。それも69mmと巨大サイズであった。

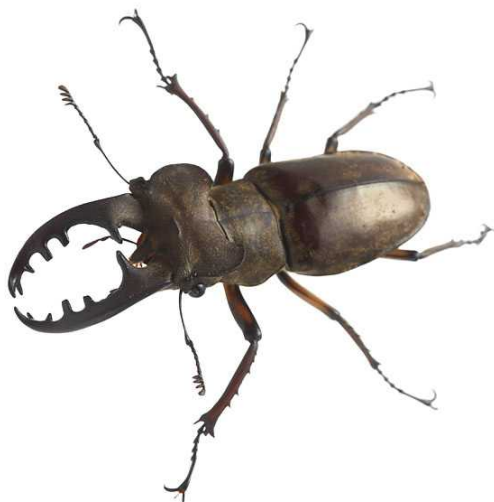
時間をもてあましていたので偶然発見

翌朝、目覚めるとあいにくの雨模様。しかし、目的を達成できたことでの充実感で満たされていた。朝食後、虫捕りハイキングに出発。前日のうちにしかけておいたベイトトラップで地面を這い回る虫たちを回収。強烈な臭いを発するゴミムシに晃平は興味をもてないようだ。よく見るとゴミムシもなかなかかっこいいのだが。途中、アンズタケのきれいな群生が数箇所あった。目的地につくと、子供たちは川遊び。

あたりの森をひとまわりしてみる。めぼしい



ベイトトラップにはゴミムシの仲間などが



ミヤマクワガタのオス、それも69mmと大物をゲット

きのこはみつからない。それでも、時間をもてあましていたので、もうひとまわり。歩道脇のくずれた斜面の上のほうに、アワタケのようなきのこを発見した。アワタケとかキッコウアワタケとか、分類がよくわからないので、積極的にはとらないようにしているきのこだが、時間をもてあましていたので、斜面を登ってみることにした。何気なくきのこを引き抜くと、柄の



2cm

タマノリグチは白バックで撮影した

根元に丸いものがついていた。石ころでもついているのかなと思ったが、よくみるとツチグリの幼菌であった。あたりには数固体のタマノリグチが生えていたが、残念ながら撮影道具はもちあわせていなかった。タマノリグチを三角紙に入れてもちかえり、白バック写真を撮影することにした。

タマノリグチの柄の基部は地面に埋もれていて、ツチグリのついているかどうかは、引き

抜かないと分からなかった。もしかしたら、今までにアワタケ風のきのこを見てみないふりして、タマノリグチを見逃してきたのかもしれない。これからは、崩れかけた斜面にアワタケが生えていたときには注意して観察することにしよう。

晃平はたくさんのクワガタを捕まえた

結局この夏、晃平は、ミヤマクワガタ、ノコギリクワガタ、コクワガタ以外にも、オオクワガタ、ヒメオオクワガタ、アカアシクワガタ、スジクワガタ、オニクワガタとたくさんのクワガタを捕まえた。冬になって、クワガタを飼育していた容器のなかのコナラ材をとりだして、しきりに材割りをしている。ナタの刃を入れると、幼虫の食痕がみえてきて、小さな白い幼虫がころっとでてくる。なんともわくわくする作業らしい。でてきた幼虫は、ヒラタケの菌糸ビンに1匹ずつ別々に入れて飼育する。クワガタショップにいくと、カワラタケやシワタケなどの菌糸ビンもおいてある。菌糸による飼育は大きな個体を得やすいという。

タマノリグチ *Xerocomus astraeicola* Imazeki ( *Boletus astraeicola* (Imazeki) Har.Takah. )

今関六也(1952)により記載された稀種。北米や欧州に産しニセショウロ属に寄生する *Xerocomus parasiticus* と比較し、本種が、ニセショウロ属ではなくツチグリの *Astraeus hygrometricus* から発生すること、子実体を切断すると断面が青変すること等の特徴により *X. parasiticus* と区別し新種とした。タイプ産地は浅川実験林(現在、(独)森林総多摩森林科学園、東京都八王子市)で、1947年10月17日と1951年7月31日に2回、当時の林業試験場の分室があった裏山で採集されたという。のち、Hongo and Nagasawa(1978)は鳥取県大山のブナ・ミズナラ林で採集した標本に基づき、顕微鏡的な観察を加え、また追加産地として京都、徳島、韓国慶州市を報告している。寄生されたツチグリの胞子は壊れているか、あるいは奇形・小型化しているという。「日本のきのこ」(山と溪谷社)によれば、福島県以南に分布し「まれ」とあるが、仙台からの情報によると、宮城県桃生郡鳴瀬町の大高森(登山道脇)宮城県利府町にある県民の森にも発生するという。イグチ類は通常外生菌根菌であるが、本種のような菌寄生という生態も非常に珍しい。千葉県では初記録であり、博物館でFB-36386(CBM)で登録した。

- ・Hongo, T. & Nagasawa, E. (1978) Note on some boleti from Tottori IV. Rep. Tottori Mycol. Inst. 16: 50-58
- ・Imazeki, R. 今関六也(1952) 日本産イグチ科. Nagaoa 2: 30-46. (解説: 千葉県立中央博物館 吹春俊光)